

住吉祭

與謝野晶子

青空文庫

海辺の方ではもう地車だんじりの太鼓が鳴つて居る。横町よこちやうを通る

人の足音が常の十倍程もする。子供の声、甲高かんだかな女の声などがそれに交つて、朝湯に入つて居る私を早く早くと急せき立てるやうに聞きえた。此処こゝに近い土蔵くらの入口に大番頭おほが立つて、

『真鍮だいの大だいの燭台みを三組、中ちゆうを五組、銅どうの燭台みを三組、大だいの大だいのおらんだの皿さんを三枚、錦手にしきでの皿みを三十枚、ぎやまんの皿みを百人前、青磁せいじの茶碗ちawanを百人前、煙草盆とをを十個。』

と中に入つて居る手代に手びかへを読み聞かせて居る。

『畳二畳敷程たこの蛸たこがな、砂の上を這ふてましたのやらう。そうしたら傍に居た娘はんがびつくりしやはつてきやつと云やはりま

したで。』

『ほんまだすか。』

『眞実ほんまだすとも、うはばみのやうな鱧はももおましたで。』

『まあ、さうだすか。』

井戸端で、昨夜よいちの夜市を見て来た女中が外の女中とこんなことを話して居る。時々思ひ出した様に何処どこかでこほろぎが鳴く。湯から上あがると縁側かまむしろの蒲筵かまむしろの上に鏡台が出てあつて、化粧役べの別家つけの娘が眉刷毛はけを水で絞つて待つて居た。青い楓かへでの枝に構かこまれた泉水の金魚を見ながら、頸くびのおしろいを付けて貰つて居ると、近く迄来た地車だんじりのきしむ音がした。

牡丹に唐獅子竹とらとらに虎虎追はふて走はしるは和藤内わとうない。

こんな歌も聞えて来た、さうすると三つの井戸の金滑車がけたまましい音を立てて、地車の若衆に接待する砂糖水を造るので家の中が忙しくなる。

『旦那様、ありがたう。御寮人様、ありがたう。』

その世話人が四五人家の中へ入つて来て父母に挨拶をした。揃の浴衣に白い縮の股引を穿いて、何々浜と書いた大きい渋団扇で身体をはたはたと叩いて居る姿が目に見える様である。白地のあかしちぢみに着更へると、別家の娘が紅の紹縹珍の帯を矢の字に明石縮に着更へると、別家の娘が紅の紹縹珍の帯を矢の字に結んでくれた。塗骨の扇を差した外に桐の箱から糸房の附いた絹団扇を出して手に持たせてくれた。店へ行く廊下を通る時大きい銀の薄のかんざしの鈴が鳴つた。菊菱の紋を白く抜いた

水色の麻の幕から日が通つて、金の屏風にきらきらと光つて居た。従兄いとこと兄はその前へ置いた碁盤で五目並べをして居る。将棋盤の廻りには十人程の丁稚でつちが皆集あつまつて居た。花毛氈の上であるから並んだその白足袋が美しくしく見える。九谷焼の花瓶に射干ひあふきと白なつぎく夏菊の花を投なげこみ込込に差した。中から大きい虻あぶが飛び出した。紅の毛氈を掛けた欄干てすりの傍へ座ると、青い紐を持つて来て手代が前の幕をかかげてくれた。向ひのおてるさんが待つて居たやうににこやかに目礼した。道の人通りが多いので常つねのやうに物を云つても聞えさうではない。水色の透矢すきやの長い袂たもとと黒い髪が海から来る風で時々動くのが見えるだけであつた。氷屋が彼方あつち此方こちで大きい声を出して客を呼んで居る中へ、屋台に吊つて太鼓を叩いて菓子

売が来た辻に留つて背の高い男と、それよりも少し年の上のやうな色の黒い女房にようぼとが、声を揃へて流行歌はやりをひとくさり歌つた。どんどんとその後あとでまた太鼓を打つた。欄干てすりの前に置いた大きい床しやうぎ机の上で弁当を開く近在の人もある。和歌山の親類の客を迎へに停車場ていしやばへ行つて居た番頭が真先まつさきになつて七八台の車が着いた。紹ろの紋附の着物を着た裏町の琴の師匠が来た。和歌山の客は皆奥で湯に入つて居るらしい。杯盤きりや切ずしを盛つた皿が持つて来られて、父も母も客も丁稚でつちも皆同じやうに店で食事をした。通る地車だんじりの数が多くなつて、砂糖水はもう間に合はないで、奉書包みを扇に載せてその世話人達に番頭は配つて、橋の上に立つて大きい目をした張飛だの、加藤清正だのの地車だんじりの彫物ほりものを和歌

山の客は珍しさうに見た。

『とても和歌祭にはかなひまへん。』

と父はその人等に云つて居る。街々の祭提灯に火が入るまでに私は三度程着物を着更へさせられた。行列の太鼓の音がほのかにすると家中の人が皆欄干の処に集る。この家が船であつたなら一方の重味で覆るであらう。猿田彦が通り、美しく化粧したお稚児が通り、馬に乗つた禰宜が通り、神馬が通り、宮司の馬車が通り、勅使が通り、行列は終になつたが、神輿はまだ大和橋を渡つたとか渡らぬとか群衆が云て居る。黒い波のやうになつて道を通る人は皆南の方を向いて神輿のお旅所の方へ行くのである。浜の方からは神輿の迎へに開運丸、住吉丸などと船の名を書いた旗

を持った若者が幾人も幾人も走はししつて行く、四五町先へ神輿みこしが来
 た頃から危ながつて道端みちはたに居る人が皆店の上へ上あがつて来る。幾
 千の弓張ゆみはり提灯の上を神輿みこしが自然ひとりで動くやうに見えて四方に懸け
 た神鏡しんきやうがきら／＼として通つた後あと二三分で祭の街は死んだ
 やうに静かになつて、海の風が藻もの香かを送る。

青空文庫情報

底本：「精神修養」

1911（明治44）年8月号

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の旧字を新字にあらためました。

※底本の総ルビを、パラルビにあらためました。

※脱落が疑われる、『旦那様、ありがたう。御寮人様、ありがたう。』の後の改行を補いました。

入力：武田秀男

校正：門田裕志

2003年2月16日作成

2003年5月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

住吉祭

與謝野晶子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>